

貨幣史研究会（東日本部会）第15回
平成16年3月11日（木）13:30～17:00

<出席者>

座長：鈴木 公雄・慶應義塾大学教授
報告：黒田 明伸・東京大学教授
千枝 大志・皇學館大学大学院博士後期課程
コメント：櫻木 晋一・下関市立大学教授
井原 今朝男・国立歴史民俗博物館教授

その他の参加者（五十音順）：

井上 正夫・東アジア経済史研究者
井原 今朝男・国立歴史民俗博物館教授
今村 啓爾・東京大学教授
大久保 隆・同志社大学教授
黒田 明伸・東京大学教授
櫻木 晋一・下関市立大学教授
田代 和生・慶應義塾大学教授
田中 浩司・函館大学助教授
千枝 大志・皇學館大学大学院博士後期課程
中島 圭一・慶應義塾大学助教授
橋本 雄・九州国立博物館設立準備室研究員
藤井 典子・日本銀行金融研究所企画役
藤田 加代子・東京大学史料編纂所特別研究員
山内 晋次・大阪大学非常勤講師

1. 研究報告

以下の報告と報告へのコメントが行われ、その後で討議が行われた。報告・コメントの内容については別添レジュメ参照のこと。

○報告1

「15世紀末及び16世紀前半の中国・日本における銭貨流通の共時性について」
黒田明伸・東京大学教授・・・別添1

黒田報告へのコメント 櫻木晋一・下関市立大学・・・別添2

○報告2

「15～17世紀における貨幣・金融の実態と地域性—伊勢神宮周辺地域を中心に—」
千枝 大志・皇學館大学大学院博士後期課程
・・・別添3

千枝報告へのコメント 井原今朝男・国立歴史民族博物館教授
・・・別添4

2. 討議の概要（文中敬称略）

（1）黒田報告

<コメントへの報告者の返答>

- ・大内氏の撰銭令と同様の状況が、中国のどの地域であったかについて、永楽銭が私鑄されていたのは、蘇州や上海周辺とみなされており、実際に撰銭が問題となっているのは北京周辺である。
- ・足立氏が銭種の差異を考慮していないという点については、宋銭は中国どこにでもあるが、“特に16世紀の宋銭が私鑄される、新銭として地域にもたらされる”という状況を考えた場合、福建の特定の地域に関係しているとみなしていいだろう。そのような点まで踏み込んで考えた方がよいのではないか、ということである。
- ・中国における洪武銭・永楽銭の流通実態については、断片的な史料ではあるが、1450年位に永楽銭ばかり流通しており、その状況は私鑄銭と絡んでいるという。そのような状況が強調されているということは、その前の時代は永楽銭以外も使用されていたということかもしれない。
- ・「悪銭」が何を指すかについては、文脈や時代によって異なる。
- ・銭流通の多層化については、地域ごとに使用されている銭が異なり、その地域の中でも使い分けが進んでいった状況と考える。より具体的には、一つはその日暮らしの人々で、私鑄銭を禁止されて困窮し、米が買えず暴動を起こすかもしれないという史料がある。また17世紀の史料で、清朝の銭が流通していても、「ある種の宋銭を金持ちの家が貯めており、宋銭の価値が下落するとその家が傾いた」という記事が出てくるので、ある種の宋銭が、資産として流通銭より高い相場で受け取られていたことがわかる。その日暮らしの人々が使用する銭、商人が普通に売買する銭、資産として受け取られる銭と、地域により異なるが少なくとも3層がありえたと考えられる。
- ・北貴南賤については、1600年頃には南の銭、官が出す銭は悪い・薄いという記事があるが、1460年頃どうであったかは不明。一般的に、後の時期に比して非常に粗悪な銭は出ていないとみなしてよいであろう。
- ・福建で私鑄銭が生産され流出する、ということは以前より言われていることであるが、私見において重要な論点は、悪銭だけではなく、悪銭・精銭の両方が流出している筈であると考えている点である。悪銭には鉛銭も含まれるかもしれないが、日本など他地域に流入した銭の中には、史料⑩に見られるような良質な銭もあるはずであると考えている。

<討議>

（櫻木）中国で時代により、私鑄銭の鑄造地が変遷する事実は興味深い。日本で模鑄銭がどのように出土するか注目している。資料をレジユメに掲げたが（3枚目、第21表）、一括出土銭に含まれる模鑄銭について、明確にデータ化した学術調査資料はこれが唯一であろう。ここでは約1割が模鑄銭であり、永楽銭も含まれている。

また現在小倉城馬場跡から出土した清朝銭を整理中であるが、中国での流通銭貨を反映している。この資料中には非常に小さな銭まで含まれており、沖縄の鳩目銭などと呼ばれているものと共通している。琉球貿易との関連性などを見いだせないかと考えている。広汎に流通していたと考えられている萬歴通寶は1枚も含まれておらず、また中国で私鑄された寛永通宝も含まれていることに注目している。

（藤井）整理中の出土銭の、鉛の産地について理化学分析は行われているのか。

(櫻木) 2点ほど鉛同位体分析を行ったが産地は不明で、1点は中国南方ではないかということである。原城で出土した鉛のインゴットは国産ではなく、大陸から搬入されたものと判定された。また、当時国内の鉛生産は盛んでなかったことがはっきりしている。小倉城近世初期の層から出土する鉛分が多い銭は、他の地域では見られず、筑前にストレートに入ってくるルートがあったのではないかと考えている。

(黒田) 鉛はバラストに使われ、南方から供給される(後に、藤田加代子氏より、主としてマラッカから来る、と確認あり)。鉛銭は中国よりもむしろジャワ方面が多い。

(鈴木) 鉛は戦国期には銭の地金としてよりも戦略物資としての意味が強かったが、そのような需要がなくなり、銭に使われるようになったのではないか。

(田代) 明の初めに銭使用を禁止し、軍事目的で紙幣を必要とするという事象は、世界史的な貨幣理論に適合している。これは元の幣制を真似しているが、元は紙幣発行により国家を財政的破綻に導く。それを見ていながら、なぜ同じ制度を踏襲し、銭使用を禁ずるのか。また私铸銭が問題化するということであるが、なぜ明は原料銅を押さえなかったのか。

(黒田) 鈔(紙製通貨)は北宋から成立するが、年間500万貫という銅銭を出している。それが、地方の官庁に溜まり、それを背景にして、地方政府同士の支払いのときに銭そのものを動かさずに、普及したのが鈔である。南宋になると日常的に使用され、銅銭については偶に紙幣と兌換できることを示せば良いということになる。ただ紙幣の額面が高くなり、民間で活発に取り引きが行われているような場所では、米や布など現物貨幣を用いた売買に戻っていく。13、14世紀頃は、やや高額紙幣を用いるところと、現物貨幣を用いる地方の市場のような二重構造となっているのであろう。重商主義国家で国家紙幣が流通している状況とは、異なる状況と考えたほうがいい。

元王朝では、元朝前半までは紙幣の発行量を押さえ、時々再発行し新しい紙幣と交換するようにしている。ただ、王朝後半期からは乱発したために失敗した。明朝は、紙幣発行を再度試みたが、やはり乱発している。

15世紀前半は混沌とした時期であった。洪武帝は非常に復古主義的であり、強制労働と現物で財政を運用した。場合によっては直接南京まで物を持ってこさせるといった体制をとった。永楽帝になり北京が都となり、財政の中心は江南地方であるが、支出は全て北京であったことから移動を必要とした。最初は強制労働と現物で財政運用をしたが、うまくいかなかったことから鈔を発行し、銅銭は一般的な貨幣としては使われていなかった。

また銅の原料の問題については11世紀北宋で500万貫铸造した際の銅銭等、既に発行された銅銭そのものが、その後の時代の銅ストックになっていると考えている。それを少し小さくして铸直すだけで利益を得られる。銅ストックはむしろ銅銭そのものと考えている。偶々多く溜まっていたのが福建だろう。

(田中) 銭は名目的なものであろうと、明・清通じて一番小さい支払い手段という考え方で間違いはないか。それより小さいものはどうしていたのか。日本だと銭1枚でかなりのものを購入できる感じがあるが。

(黒田) 15世紀後半で、1日2、30文で一家が暮らしているという記事がある。都市に住んでいる人は数十文という感じである。銭を使う頻度は中国の都市民の方が、日本の中世より高いのではないか。

(鈴木) 消費活動がどこまで活発であるかと関係するのではないか。零細な消費者層が多くなれば、相対的に経済の方が大きくなるので、少ない場合は現物貨幣の取り引きで可能であるが、町のような市場が出現すると、現物では間に合わず、金属貨幣が必要となる。その時期が日

本の場合 15 世紀後半なのではないか。

(田中)よくない銭が出てくると、そこで黒田さんが言われている支払協同体的なものができ、その地域で通用するといった実態がみられるようになるという理解でよいのか。

(黒田)そのような因果関係の場合もあるし、他の場合、たとえばその地域独自で素材価値の低い通貨を創り出すような場合もある。

(鈴木)そのレベルでは納得の上交換できればいい。もうひとつ上のレベルでは、蓄財されており、良い銭が選ばれるといったことが起こる。その重層性が出てくる時期で、貨幣遣い自体が変わってきているのだろう。これは、供給者、利用者の量の問題が大きいのではないか。

(田中)米にリンクしていこうとする場合と、銭という形を求めて一番小さいところまで銭で考えようという場合があり、ある時期に境界があるのではないかと考えるが、その境界は興味深い。

(鈴木)貫高制が石高制に還元するといった、もとに戻ることが可能な時期が 16, 17 世紀である。その先は貨幣でなければならぬ形となるのであろう。その境界に対し、それぞれの人たちの対応の仕方が貨幣遣いの錯綜した状況を生み出している。同じような構造が、日本・中国それぞれに出現しているが、現象として並行してもおかしくない。

(黒田)ただ、これだけ日中並行しているのはこの時期しかないだろう。

(中島)日中並行の現象が互いに何らかの関係を持っていることは動かし難いであろう。15 世紀後半の日本では港の後退がある。例えば津軽十三湊が潰れたり、伊勢の安濃津は 15 世紀末(1498)の明応の大地震により港が潰れるが、すぐには再建されない。草戸千軒も 16 世紀初頭より衰退していく。また、15 世紀の終わり、16 世紀変わり目に商人が替わっていると考えられる。近世初頭の角倉のような初期豪商は 15 世紀まではさかのぼれない。

おそらく日本は 15 世紀のある段階から、物流や商品流通が大きな経済的な変動期に入り、中世的システムから近世的システムへと変化し、最終的に固まるのが 17 世紀半ばであろう。その変動と貨幣の在り方も関係しているのであろう。中国では貨幣に関しては並行現象がみられるが、商品流通などにおいても日本と同様の経済変動が起こっているのかも考える必要がある。

また貿易のあり方は 15 世紀のある段階までは、明の海禁を前提とし、それを基盤に日本と朝鮮などとの貿易、さらに中継貿易拠点として琉球が挙げられる。16 世紀になると中国密貿易いわゆる後期倭寇が、それまでとは異なる東シナ海・南シナ海まで含めた世界経済のあり方を変えていると思う。そのように貨幣だけではなく、もう少し大きく捉えていく必要もあるのではないか。

(黒田)15 世紀は不明だが、16 世紀嘉靖年間(1521~1566)位からはっきり出てくるのは、福建が絡んだ事象である。いわゆる江南、具体的には浙江や蘇州近郊で絹・綿布を買い、福建に運び銀を得るという話が、万暦年間(1572~1620)の小説類で頻出する。小説で出てくるのは、大儲けをしようと思い、偽の銀をつかんでしまうといった類の話である。その銀は嘉靖年間に関しては日本から入手したとしか考えられない。

(鈴木)貨幣を中心とした枠組みを構築すると同時に、それぞれの地域で実態としてどこまで細かく追えるかが問題となってくる。

(2) 千枝報告についての討議の様相

< 討議 >

(黒田)史料 24 はいつ頃の史料か。

(千枝)(山田奉行宛であるので)江戸初期であるが傍線部分の内容的には天正 10 年年代だと考えられる。

(黒田)史料 24 の2行目のような記述はこの時期他にも見られるのか。

(千枝)他には見られない。この史料が江戸初期の写しである点が気になるころではあるが、史料 23-A のような史料は、他にも見られるので、史料 24 の記述はおそらく本当のことであろう。

(黒田)「はやり銀」といった記載は他にもあるのか。

(千枝)「時のはやり銀」や「時のはやり升」といった記述は他にも出てくるので、流動性のあるものということだと考えられるが、詳細はわからない。

(千枝)コメント(1)のご指摘については102枚ではなく72枚であると考えている。前回本多氏の報告の史料に「百文仁荒銭参拾文指の並銭」とあったが、ほぼ書き方が同じである。少なくとも計算貨幣ではあると思うが、100文で72枚で構成しているが、その中の半分以上が悪銭であると理解した。

(井原)72枚は鑊銭で72枚ということか。

(千枝)おそらく悪銭・撰銭ではない中銭のようなものと考えているが、実証はできない。井原先生のレジュメ A(1)にある「時正銭」とあるのは、時の精銭、時の相場という意味だと思われるが、時代によりいい銭が変わるという変動の実態があるのだろう。史料はないが、「時の精銭」はある時は精銭になり得るが、そうではない時もあるという中銭のようなものではないかと考えている。

(鈴木)これまでの銭貨研究では、史料の根拠があれば「精銭」「悪銭」などの定義をして解釈しようとする傾向が強かったが、今回の提示された史料からはそれぞれの地域経済の中で、状況に応じ定義が決定されていることがわかる。貨幣は、お互い納得して決済ができればよいので、そのような観点をに入れて考える必要があり、定義づけは難しい。

(千枝)なぜ河崎の相場であったか<コメント(5)>については、まず元和年間(1615~1624)と思われる史料に、山田の自治組織山田三方運営のための年貢を河崎が滞納したため、河崎での売買を停止させられているというものがある。河崎は山田三方の影響下に置かれ、支配され、また取引まで影響を与えていることがわかる。

溯って文禄3(1594)年の太閤検地免除の際、免除の礼金捻出のため、山田三方が課役をかけているが、河崎の浄泉院が課役を納められないので屋敷を売却している史料がある。この事例より文禄年間(1592~1596)には、河崎は山田三方の影響下にあったことが明らかとなる。

一方大湊は、中世から近世初頭は山田の町や山田三方の影響下には含まれていない。また河崎は勢田川水運としての関係上、大湊の影響は受けているものの、町の支配などの影響については、山田三方が管理する山田の一郷的な地域であったと理解している。元和期の山田三方の河崎における売買停止事例や、中近世の河崎の市場的機能(金融物流機能)等を考慮すると、河崎は山田の市場的役割を担っていたと考えられる。さらに水害に強い地理的条件や、防衛施設・蔵等が立ち並ぶ都市であったために、山田や大湊ではなく、河崎に相場が置かれたと考えている。

<補足>

○研究会終了後、千枝氏・橋本氏より以下の情報が寄せられた。

※メールにて受領した原文の通り

<千枝氏より>

過日の黒田先生による貨幣流通の日本・中国共時性についてのご報告興味深く聴講させていただきました。その中で両国共に15世紀半ば頃にえり銭状況になっており関係があるとのこと指摘もあったかと思いますが、拙考でも伊勢神宮付近では永享年間頃にえり銭や悪銭流通状況がみえることを指摘しました。

その後黒田先生の指摘を踏まえて見直してみますと永享六年に室町幕府神宮方頭人摂津満親が飯尾肥前守為種に外宮遷宮の萱葺費用百貫文等を五号船の料足で下行するように命じている史料を見つけました。この五号船とは恐らく遣明船のことかと思えます。

また伊勢神宮の遷宮費用の捻出のために派遣された同時期の遣明船の伊勢法楽舎船の存在も気になる所です。

そのように考えれば遣明船で中国→堺？→京都→伊勢という百貫文の銭貨の流れを想定することも可能かとも思えます。そうなると中国と日本の撰銭状況等の共時性の影響も伊勢神宮付近地域をも含めて考えることも可能かと想定した次第です。

史料典拠は三重県史資料編中世1上所収の永正九年宮司引付の二五号史料の外宮御萱要脚下行注文と二六号史料の室町幕府神宮方頭人摂津満親奉書などが翻刻分の関連史料です。

<橋本氏より>

千枝さんのご指摘の史料、知らなかったので大変興味深く覚えました。遣明船には、多様な勢力のさまざまな思惑・関心が載っていたのだな、という認識をさらに確かにしました。

以前、遣明船の派遣契機について調べたことがあります。式年遷宮もその候補でしたが(岡野友彦氏の近著にある「源氏長者」も)、いずれも契機とは見なせませんでした。とくに式年遷宮は、室町時代におけるランダムさ(要するに遅延)を想定しても、派遣契機というよりも、遣明船の利益をさまざまな支出に回す、という事後的利用性が強かったようです。以上は余談です、すいません。

さて、永享年間の2度の幕府遣明船は、渡航先として福建を使っていたと考えられます(妙智院文書『戊子入明記』)(今まで寧波発着と考えられていたのですが、良く読めば福建だということが分かります)。

(瑣末ながら、問題は渡航ルートです。通常考えれば福建からなら琉球列島経由。16世紀なら薩摩→豊後水道→瀬戸内海→堺ですが、この時代は分かりません。博多を回った可能性も否定できない。というのも、中世前期は、福州発寧波経由博多着、という海上ルートも見られたからです。今は結論を保留中。)

すると、興味深いことに、福建で使われていた銭が(兵庫経由で)入ってきた可能性が高いということになりますね。

ただし、すんなりとそのまま輸入銭が入ったかどうかはまた一考を要します。バラストとしての銅銭がそのまま来たならば話は単純ですが、唐物目利(目聴)が評価額を付けた後、折紙などで下行したりしたものか、いわゆる「抽分銭」として出入りしたものであるか、いずれにせよもしそうだとしたら、その銭はむしろ日本を流通していたものと考えざるを得なくなります。

ここでの「料足」が、即物的な意味で一体どのようなモノを指しているのか、ご意見を伺いたい

ところでは。

ただ、福建流通銭(ないし偽造銭)が永享年間に畿内に流入していたとすれば、それはやはり凄く面白いですし、夢に満ちあふれた話です。個人的には支持したい気持ちですが、もう少し決定打が必要なような気がします。

なお、ご存じの方も多いと思いますが、伊勢法楽舎船については、小島鉦作 1985「遣明勘合貿易船法楽舎船の考察」『小島鉦作著作集2』吉川弘文館なる専論があります。

以 上